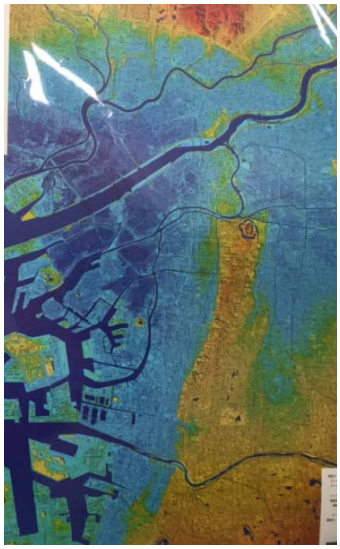
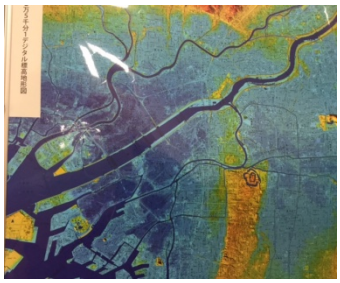
# 大阪の地形と歴史



写真は大阪市立中央図書館で撮った「2 万 5 千分 1 デジタル標高地形図」。地形図は大きく重く、ビニールに包まれた写真なので撮るのに苦労した。

上の東西に流れる大きな川が淀川、下が大和川。その南は堺市。黄やオレンジは標高が高く、ブルーが低いところ。ブルーの標高が低い地帯が広がっている。黄の先端部分に大阪城があり、南に向けて台地が形成されている。これを見ると、名古屋の標高地形図を思い出す。名古屋にも同じような台地があり、その先端に名古屋城が位置している。大阪は台地の東にも、ブルーが広がっている。



釜井俊孝『埋もれた都の防災学ー都市と地盤災害の 2000 年』京都大学学術出版会、2016 年 9 月のなかに、地形図に関係するところがあったので紹介したい。

大阪の地形で最も特徴的なものは、町なかを背骨のように南北に細長く貫く台地の存在である。上町台地と呼ばれるこの台地の西縁には、南北に約 40 キロメートルにわたって続く、上町断層と呼ばれる活断層が存在し、これを境に東側が隆起する地殻変動が続いている。一方、台地より東側の河内平野は、大和川や平野川などの河川が発達する沖積平野であり、結果的に断層に近い部分だけが上町台地として細長い高まりとなったと考えられる。今から約 6000 年前の地球は、急速な温暖化に伴う海面上昇期であった。現在の海面よりも 2〜3 メートルは高かったと考えられている。この海面上昇は、汎世界的に知られており、わが国では、ちょうど縄文時代中期に当たるので縄文海進と呼ばれている。大阪の場合、縄文の海は現在の海岸線よりも相当内陸まで侵入し、上町台地はそうした海に突き出た半島であったはずである。

約 6000 年前をピークにして、縄文の海は次第に退いていった。海が去った後には、広い砂浜が形成された。上町台地の北端から鳥の嘴状に突き出た部分を天満砂堆、台地の西側の部分を難波砂堆と呼んでいる。その東西の幅は 500 メートル〜2 キロメートルと変化するが、海沿いの微高地で排水が良く、高潮や洪水の被害は少なかった。そのため、天満、船場、島之内といった江戸時代の市街地は、この砂堆の上に分布している。

（2016 年 12 月 26 日）